

柏木教会月報

東京都新宿区北新宿3-1-18

☎03-3368-2156

牧師 大浦 勝

目 覚 め て 備 え る

マタイによる福音書二五章一～三節

牧師 大浦 勝

「だから、目を覚ましていなさい。あなたたちは、
その日、その時を知らないのだから。」（二三節）

この「十人のおとめのたとえ」でも、神の国は婚宴にたとえられている。婚宴はいつの時代にも喜びと祝いの時であり、人はそこでは何をおいても喜び祝う。わたしたちはこのような喜びへと招かれており、今この喜ばしい祝宴を待つ備えの時を過ごしている。讃美歌一七四番はこの喜びの到来を美しく、また、輝かしく歌っているが、わたしたちはここに表されているような喜びをもつてその時を迎えることができるよう、それに向けての備えの時を過ごしていきたい。

一〇人のおとめは共にともし火をともして花婿を出迎えようとしていたが、その内の五人はともし火と一緒に油を入れた壺を携えていたが、残りの五人は予備の油を用意していなかった。前者は賢く、後者は愚かであったと言われている。真夜中に花婿が到着したとき、彼女たちのともし火は消えそうになっていたが、賢い者たちは、用意していた油を補給してともし火を明るくすることができた。しかし、愚かな者たちはあわてて油を買いに行かなればならなかつたが、その間に婚宴の部屋の戸は閉じられ、彼女たちは中へ入ることができなかつた。

おとめたちは花婿であるキリストを出迎えようとしていたのであるから、一〇人ともキリスト者である。それでは、賢いと言われている者たちが持つていて、愚かと言われている者たちが持つていなかつた「油の壺」は、具体的にキリスト者の生活の中の何を指しているのだろうか。信仰や聖霊を擧げる人もいれば、良いおこないや愛のわざだと言う人もいる。また、祈りを擧げる人もいる。それぞれ意味のあることである。しかし、それが何であれ、このたとえはわたしたちに、いつもキリストを迎える備えをしているべきことを教えてくれる。生きている間にキリストを迎えることになるのか、それがとも死んでからなのか、わたしたちは知らない。それがいつ起こるのかも知らない。しかし、わたしたちは必ずキリストのみ前に立つことになる。その時にあわてふためくことなく、喜びをもつてキリストを迎えることのできる人は幸いである。その幸いを自分のものにするためには、いつでもキリストを迎えることができる用意をしているべきである。

わたしたちはいつの間にか、キリストを待つ信仰の姿勢を失つてしまつてゐる。それは、現代人にとって救いとは、この世を生きている間のことになつてしまい、その結果、人はこの世の生活をすべてと考えて、ひたすらこの世での幸いだけを追求するようになつたからであると言われる。もしそのためにキリストを迎える信仰の姿勢を失い、そのための備えを怠つてしまつてゐるならば、わたしたちは恐れなければならない。